

— 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

あるとき地図や海図の上に存在していたものの、やがてその不在が確認された島、いわゆる幽霊島や幻島と呼ばれるものは地図の歴史に関連して広く関心を寄せられる話題である。最近の話でいえば、ニューカレドニアの沖合にあるとされ、グーグルマップにも描画されていた「サンディ島」なる島が、二〇一二年になって実在しないことが判明したとしてニュースになった。その少し前には、メキシコ湾に存在するとされていた「ベルメハ島」について、二〇〇〇年代になってから排他的経済水域の画定を目的とした調査が行われたが、けっきょく存在しないことが明らかになった。これらの出来事は世界的に報じられるニュースとなった。

こうした、いつてみればAきわめてローカルな出来事が世界で報じられた理由はなんだろうか。おそらくひとつは、全地球が宇宙から観測されるこの時代になっても、島まるごとの規模で地図（あるいは地図へと集約される私たちの地理的知識の体系）が「誤りうる」ことへの驚きを私たちが共有するからだろう。

素朴に考えれば、この種の幽霊島の物語は地図がより「正確」なものへ更新されるプロセスの一部だ。現代の私たちはカルトグラフ地図作成の営みを、ほとんど暗黙的に、全世界の統一的・普遍的な図化という一九世紀以降に確立する企図のもとに進む過程と理解している。ならば存在であろうと不存在であろうと、意外なものが理想的地図との齟齬として「発見」されることは驚きとして受け止めねばならないし、それによって地図の全体が更新され、さらに理想へ接近することは喜ばしい前進でなければならぬ。ニューカレドニア沖やメキシコ湾の小さな島の命運は、その意味で地図の営みに関わるからこそ、局所的な事象を超えた世界的ニュースとなった。別のいい方をすれば、幽霊島への驚きは現代の地図に寄せられる信用の裏返しなのだ。

また、ニュースにおいては、これらの島々はそれぞれ一八世紀、一六世紀の報告にその出自があるものと報じられた。どうやら幽霊島は地図に一瞬間かれる過去への扉であり、私たちはそれを覗きこまずにはいられないのだ。おそらく幽霊島がその出自へ私たちの関心を遡行させる働きにも、無意識に地図に寄せられる信用が関わっている。「そこに存在する」という当然の理由

がないにもかかわらず地図に登場するのならば、その地図的誤謬ごびりやうの起源が示されない限り地図への信用は回復されないからだ。

さらにいえば、あるとき地図に存在していて後に取り消される対象は島には限らない。しかし私たちが幽霊島に特別な視線を注ぐとするならば、その背景には、地理的要素としての島の特異さや、私たちが島に抱く特殊な感情も考慮するべきかもしれない。ステイヴン・A・ロイルは、島は「異なる現実」に属する場所であり、それゆえに「魂の避難所」とされたり、あるいは冒険心を掻き立てられる対象だったと指摘している。ロイルによれば、少なくとも西洋人の心理には島がパラダイスだという観念が（現実の島のあり方や、島からの視線とは無関係に）焼きついている。発見されぬままに消えた島が発揮する吸引力もまた、こうした想像力と無関係ではないだろう。

これまでに語られてきた数多くの幽霊島Bの物語を概観すると、そこには幽霊島の誕生から死に向かう、いわばひとつの生としての語りのパターンが見出される。まず語り手はその島の由来を語る。船乗りの目撃談、人びとの語る伝説、あるいは論理的帰結として島の存在を導く宗教的、「科学的」、その他さまざまの学説。いずれであろうと、それは島の存在理由を説き、人びとを島に向かわせるナラティブとして機能するミクロな創造の神話である。ここでは船乗りの証言と、宇宙の成り立ちを語る学説が同じ効力を発揮する。そして終結、つまり島の死のほとんどは、探検や調査の結果による存在の否定として宣告される。しばしばそれは幽霊島を準備した物語の行く末、つまり証言の信頼性の変化や、宗教的世界観の刷新や、学説の否定といったものは無関係に起こる。

たとえば、南洋に存在が予想されたいわゆる南方大陸は、一五一五年に地球儀に登場して以来、数多くの地図に描かれてきた。予想された大陸は巨大であったがゆえに、探検の時代になってもオーストラリア近辺で何かが見つかるたびに南方大陸の証拠であるとされ、一九世紀に至るまでその可能性は否定されなかった。

この南方大陸を準備したのは、地球の南半球には北半球の陸地につきあう重量の陸地が存在しているはず、とするアリストテレスやプロトレマイオスの古代の地球論だった。中世になると、この古代の学説はキリスト教的な世界の対称性を支持するものと再解釈され、大陸の存在は疑われなかった。さらに近代科学の時代になっても、断片的な陸地の存在という経験的な知識を根拠

として大陸の存在は支持されつづけた。これは幽霊島がその根拠となる理論の変遷を越えて持続する例である。

幽霊島の物語にもうひとつ共通しているのは、その大半にひとつの画期が存在することだ。それは地図や海図に記載されることである。地図に記載されることは必ずしも幽霊島の存立の条件ではないが、相互の参照や複製を繰り返す地図というメディアの粘性がその流布や延命に関わっていることは疑う余地がない（短命に終わった幽霊島として記憶される例は、たとえば一九世紀末にカリブ沖で存在が報告されたカンティア島がある。この島は発見から数十年のうちに探索を経て存在が否定され、けっきよく主要な地図には記載されなまま忘却された）。その際に重要なことは、たとえば近世のイゾラーリオ（島嶼書）のように幽霊島が一個の孤島として描かれるのではなく、より大きな文脈、典型的には世界地図のようなものに描き込まれること、そうやって反復や引用が可能な地図の空間に参入することである。

本稿では、地図史上の束の間の存在として幽霊島の持続やその生死を語るのではなく、どちらかといえば幽霊島の持続という視点から地図について考えてみたい。幽霊島というカテゴリーが地図史のトリビア以上の意味をもちうるとすれば、それは個々の幽霊島の生を超えた何か、たとえば地図史への新たな視点をもたらす契機となる場合だろう。ひよつとすると、それは世界の似姿を描く、という素朴な前提に依らずして地図を作ったり、その歴史を語ったりするヒントを与えてくれるのではないか。

その手がかりとして以下に紹介するのは、ロイルのいう「パラダイス」としての島の原型のような著名な幽霊島であり、比較的古くから地図上に描かれた例である聖ブレンドンの島の経過である。

聖ブレンドンの島の出自は実在するアイルランドの聖職者、聖ブレンドン（c）の航海の物語である。聖ブレンドンは四八〇年ごろにアイルランドで生まれ、五二二年に聖職を授任した人物であり、事績は一三世紀に成立したアイルランドの聖人伝集成「リズモアの書」に伝えられている。それによれば、聖ブレンドンは隠遁の地を求めて何人かの船乗りとともに長い航海に出て、幾多の驚異に出会った後、天使の飛び立つ聖なる島に到達した。アイルランドの修道士が隠棲の場所を求めて旅するのは珍しいことではなく、この物語の骨子が事実ではないと考える理由はない。つまり、聖ブレンドンが少なくとも何らかの航海を行ったことは確からしい。

彼の物語が一〇世紀ごろにヨーロッパに知れわたるきつかけは、ラテン語で書かれた『聖ブレンドン島の航海』という書物だった。『聖ブレンドン島の航海』によれば、聖ブレندانは聖なる島を発見した後、いったんアイルランドに戻り、今度は楽園の島を探す航海に出て、七年の冒険の末にこれを見つけた。写本には異なるヴァージョンが存在するが、よく知られているものの概略は以下の通りだ。

聖ブレندانは四〇日の断食のあと、六〇人の船乗りと一四人の修道士とともに楽園の島を目指して大西洋の航海へ出発する。ひと月の風の後、一行は最初の島に流れつく。この島では悪魔の用意した食べ物を見つける。さらに一行は七か月航海して巨大な羊のいる島に着く。これを殺して焼こうとしているときに島は沈みはじめ、島だと思っていたものが海の怪物だったことが明らかとなる。一行はさらに何か月かの旅をする。鳥のいる島、修道院のある島、沼のような海、毒魚の島、また別の大きな海の怪物への上陸などを経て、一行は耐えがたい寒さの「眠った海」にやってくる。ここではドラゴンに遭遇するが別の怪物に救われる。さらに巨大な水晶の神殿を見たり、煙を吐く島や悪臭のする島、さらには流浪の身のイスカリオテのユダが暮らす島を経由する。そしてある島で出会った人物に楽園の島への行き方を教えられ、ついに目的の島にたどり着く。ここでは羽毛をまとった男や死んだ巨人など不思議なものに出会う。一行は果物と宝石を船に積んで帰路につく。

九世紀初頭から確認できるこの航海の物語は、ラテン語だけで一二〇を超える写本となって広まり、ゲール語、フラマン語、カタルーニャ語、ドイツ語、フランス語、北欧の諸言語などさまざまな言葉で言及された。現代では『聖ブレンドン島の航海』を構成する要素の多くは航海譚^{イムラガタ}として伝わるさまざまな伝承の寄せ集めで、現実の航海の全体を反映したものとは考えられていない。一部にはこの物語がヨーロッパ人によるアメリカ大陸の発見を意味するという者があるが、それよりも、当時把握されていた北大西洋の地理が反映されているとの解説の方が説得的に思われる。むしろ重要なことは、中世初期の人びとがこの物語をどのように捉えていたかだろう。

聖ブレンドン島の島がはじめて地図に出現するのは、一二三五年ごろに作成されたマップ・ムンディ（世界図）である。ドイツのベネディクト会修道院、エプストルフ修道院の祭壇画となっていたこの地図は代表的なマップ・ムンディのひとつで、T O 図

の形式を踏襲してエルサレムを中心に、東を上にした世界が描かれている。この円形の世界図の下方やや右、つまり真西からやや南へ下ったあたりの、緯度でいえばカナリア諸島のあたりの外周部に四角形の島が描かれ、以下のような注記が添えられている：

Insula per[e]dita hanc inventit S[an]c[t]us Brandanus a qua cum navigasset a nullo hominum a postea a inventa
(失われた島…この島は聖ブレンダンが発見して去った後、誰にも発見されていない)

このマップ・ムンディの作者と目されるティルペリのゲルヴァシウスは『皇帝の閑暇 (Otia Imperialia)』という逸話集を編んでおり、その出典のひとつに一二世紀初頭の宇宙論や地理を集成したホノリウス・アウグストドゥネンシスの『世界像 (Imago Mundi)』がある。ホノリウスの『世界像』では聖ブレンダンの島は *Perdita* (失われた) と呼ばれる島の伝説として記載されており、この島は探しても見つけることはできず、偶然にのみ発見されると書かれている。ゲルヴァシウスのマップ・ムンディも当時のこうした認識を反映したものと考えられる。つまり聖ブレンダンの島は、はじめて地図に描き込まれた時点ですでに存在が疑わしいことが明示的に示された、いわば「疑存島」だった。これは通例、ひとまずは暗黙に存在が主張される島として登場する幽霊島の中にあつては特異な事情である。

この島は同じく中世のマップ・ムンディであるヘレフォード図 (一二七五年ごろ) にも登場し、ほぼカナリア諸島に相当する位置に「六の幸運の島、聖ブレンダンの島」との記載がある (実際には島は五つしか描かれていない)。さらにイタリア出身のマヨルカ人アンジェリーノ・ダロルトによるポルトラーノ図 (一三三九年) では、聖ブレンダンの島はさらに北へ移動しており、カナリア、カプララ、コレイマリスと記された三つの島が「聖ブレンダンの島々」として記載されている。そのひとつは名称にカナリアとあるが、この三島が対応するのは今日のマデイラ諸島、すなわちカナリア諸島の北方の群島である。

一六世紀には、セバスチャン・カボットによるものとされる一五四四年の地図において、大西洋の沖合、ほぼニューファウンドランドに相当する緯度に描かれていることが確認できる。さらにゲラルドゥス・メルカトルの世界地図 (一五六七年)、アブラハム・オルテリウスの世界地図 (一五七〇年) では、「聖ブランダイン (S. Brandain) の島」あるいは「聖ブラダイン

(S. Bratlain) の島」について同じようにニューファンドランドの沖合に確認できる。

聖ブレンダンの島はこれらの地図を典拠として、その後も一七世紀半ばまで地図に描かれつづけた。その終局において聖ブレンダンの島は大西洋の沖合から姿を消すものの、そもそもその出発の地ともいえるカナリア諸島では人びとが未知の島として語る伝承が残り、ラ・パルマ島から視認したという証言が一八世紀半ばまで記録されている。

聖ブレンダンの島は一七世紀まで地図上に描かれたが、時代とともに大西洋のさらに沖へ、さらに北方へと移動した。この島の所在がカナリア諸島近辺からマデイラ諸島の位置に移動した一四世紀はじめごろは、ヨーロッパ人がカナリア諸島に到達して植民地化を始めつつあった時期にあたる。つまり聖ブレンダンの島は、知られざる夢の島としての、つまり想像力が充填される別世界としての魅力を失いつつあったカナリア諸島からさらに沖合へと移された。アメリカ発見後の世界像であるメルカトルやオルテリウスの地図では、ドロギオ島やフリースランドといった他のさまざまな幽霊島が身を寄せる北大西洋へと押しやられている。

最初から「失われた島」として地図に登場した聖ブレンダンの島は、いわば発見から逃げ去る島であり、地図は、時代の経過とともにこの島をヨーロッパ人の既知の領域の先へと移しつづけることによってその遁走に加担した。このことは何を意味しているのだろうか。

冒頭に、現代の私たちは幽霊島を地図の誤謬の発見とその改訂にまつわる出来事として、つまり「正確性」を志向する地図の過程を画すひとつの出来事として受け止めると述べた。聖ブレンダンの島の例が私たちに教えるのは、幽霊島は単なる地理的誤謬とは限らないこと、さらに幽霊島という現象はその消滅という出来事によってのみ記憶されるものではなく、むしろその持続を通じて意味を担いうることだ。聖ブレンダンの島は存在証明も不在証明も必要のない、いわば「発見されない」ことの曖昧さによって、ある時代の人間の営みを証言する装置だった。私たちが真に驚くべきことは、地図というメディアが、存在証明のなさによって存在し続ける矛盾を孕んだ対象を四〇〇年にわたってそのままに保存していた事実だろう。

中世から近代初頭にかけての世界図や世界地図に聖ブレンダンの島が曖昧なままに存在し続けたことは、地図というメディア

がある種の自覚的な不確実性を受け入れ、保持し、それを通じて新しい意味を生み出しうる可能性を想像させる。しかもこの曖昧さは地図に求められる「正確さ」によって排斥されるものではない。デジタル化された地図の時代を生きる私たちは、むしろ「正確さ」の限界を示し、補完し、別の可能性を開くものとしてこの種の曖昧さについて考えてみるべきだろう。

(東辻賢治郎「ないものの生が教えること」)

注 TO図 中世ヨーロッパで使用された、キリスト教的な世界観に基づく世界地図。

設問

(一) 傍線——A「きわめてローカルな出来事が世界で報じられた理由」として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 存在しない島が地図に描かれていたことが実際の調査に基づいて明らかになったという出来事は、全世界の統一的・普遍的な凶化という営みを妨げ、地図への信用を覆すこととなったから。
- 2 二〇〇〇年代に入ってから島まるごとの規模で実在しないことが明らかになった「サンディ島」や「ベルメハ島」の事例は、地図に信頼を寄せる私たちが驚かせる事象であったから。
- 3 全ての小さな島が地図上に正しく描画されたという事実は、全地球を宇宙から観測する技術が高度になったことを示す、局所的な事象を超えた出来事とみなされたから。
- 4 ごく最近までニューカレドニア沖やメキシコ湾における島の位置と排他的経済水域とを示した地図が存在していなかったという事実を、私たちが驚くべきこととして受け止めたから。
- 5 地図に描かれていた島の不在が確認されたという事実によって、全世界の人びとは島に対して抱いていた特殊な感情を失い、地図に寄せられてきた無意識の信用が揺らいだから。

(二) 傍線——B「幽霊島の物語」に関する説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 幽霊島の物語は、証言の信頼性の変化や学説の否定が起こっても容易に終結するとは限らず、島が描き込まれた地図の複製や引用が繰り返されることによって時代を越えて延命する可能性がある。
- 2 幽霊島の物語は、しばしば島の存在理由を説き人びとを島に向かわせるものとして機能するため、地図や海図に記載されるよりも説得力のある確かな情報として流布する可能性がある。
- 3 幽霊島の物語は、島が地図に描き込まれて反復や引用が可能な状態になることでより大きな文脈に参入することになり、各地でさまざまな語りのパターンが誕生する可能性がある。
- 4 幽霊島の物語は、島の由来を語る複数の説が時代を越えて次々と現れるが、多くの場合は地図に記載されるといふ画期において効力を発揮できなくなり終結する可能性がある。
- 5 幽霊島の物語は、パラダイスとして語られた島に人びとが向かった結果、経験的な知識に基づいて島が地図に描き込まれることを通じて変遷する可能性がある。

(三) 傍線——C「聖ブレンドン島の航海の物語」の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 「リズモアの書」に基づいてラテン語で書かれた『聖ブレンドン島の航海』という書物を発端に、多くの写本が作られたことで、一〇世紀にはヨーロッパに広く知られる物語となったと考えられている。
- 2 楽園の島を目指して行ったという航海の具体的な内容のうち、現在よく知られているものは現実の航海に即したものでないが、中世にはより正確に行程を記録したヴァージョンが存在したとみなされている。
- 3 楽園の島へたどり着くまでの航海の経路や日数が明確な形で物語が伝えられているため、当時の北大西洋の地理を把握することのできる貴重な航海譚として現代でも捉えられている。
- 4 非現実的な要素が含まれるが、ラテン語以外のさまざまな言葉でも広く言及されていくことになり、物語を通じて中世初期のヨーロッパの人びとが持っていた地理に対する認識を捉えることができる。

5 さまざまな伝承を寄せ集めて作られた航海譚であることに加え、複数の異なる写本が存在し事実を確認することができないため、聖ブレンダンの航海自体が虚構であった可能性がある。

(四) 傍線——D「発見から逃げ去る島」の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

1 聖ブレンダンの島は一二世紀初頭の宇宙論や地理にまつわる記述を反映して一三三五年ごろの地図に描き込まれたが、ヨーロッパの人びとは視認したという証言などを参考にすることでより正確に島の地形を描こうと、一七世紀まで地図の改訂を試みつづけた。

2 聖ブレンダンの島は時代が下るにつれて色々な形状や数で地図に記載され実態が定まらなくなり、さらにメルカトルやオルテリウスの地図では幽霊島が身を寄せる北大西洋へと押しやられたことで、ヨーロッパの人びとは次第に興味を失っていくこととなった。

3 聖ブレンダンの島ははじめて地図に描かれた時から存在が疑わしいと明示された特異な島であり、別世界の伝説的な地としてヨーロッパの人びとに認識されたことよって、時代を経る中で地図上の既知の領域の先へと移されつづけることとなった。

4 聖ブレンダンの島ははじめに地図上でカナリア諸島の近くに描かれた後、地図の改訂のたびにヨーロッパの人びとによってより理想的な場所である沖の方へと移動させられたが、カナリア諸島の伝承や視認したという証言が地理的に矛盾するようになり、地図から姿を消した。

5 聖ブレンダンの島はゲルヴァシウスが作ったとされるマップ・ムンディに描かれた時にはすでに消滅した島とされていたが、後の時代にニューファンドランドの沖合の島であるとヨーロッパの人びとに把握され、存在が確認されないまま地図上の位置だけが固定されることとなった。

(五) 本文の内容に合致するものを、次のうちから三つ選び、その番号を記せ。

1 アリストテレスやプトレマイオスの唱えた古代の地球論は、後に南洋に南方大陸が存在するという考え方につながるもの

であった。

2 アイルランドの修道士が隠棲の地を求めて旅をした事実は、必ずしも島が人びとの冒険心を掻き立てるものであるとは限らないということを示している。

3 近代科学の時代になり、断片的な陸地の存在という経験的な知識を根拠として、「天使の飛び立つ聖なる島」の伝説は再解釈された。

4 カンテリア島はカリブ海に存在する島として一九世紀末に報告されたが、宗教的世界観の刷新を画期として証言の信頼性が変化した後、探索によって存在が否定された。

5 実在しないにもかかわらず存在が予想される島の方が、実在する島よりも想像力を喚起する。

6 聖ブレンダンの島は、実在する「聖ブランドイン (S. Brandain) の島」や「聖ブラダイン (S. Bradain) の島」といった似た名称の島と取り違えて地図に記されたことがある。

7 西洋人にとって島は「魂の避難所」とみなされる対象であったというステイヴン・A・ロイルの見方を取り入れながら、筆者は論を展開している。

8 筆者は、幽霊島にまつわる船乗りの目撃談や人びとの語る伝説をミクロな創造の神話と捉えている。

(六) 「幽霊島の持続」が現代の私たちにとってどのような意味をもつと筆者は考えているか、説明せよ(四十字以内、句読点を含む)。

(以上・九十点)

二 次の文章は、阿仏尼が娘にあてて書いた手紙の末尾である。これを読んで、後の設問に答えよ。

思ひ出で候ふに従ひて、よろづのことを申し続け候へば、同じことも多く、御覽じにくくも候ふらん。申しても申しても、この世、後の世にも、心の末通り、重りかに、まことある人がよく候へば、人の上を御覽じても、よからんにつけ悪しからんにつけ、御心つくべきものにて候ふ。

朝夕そはせ給ひ候はん人にも、心の際みえて、「あら興ざめ」など思はるる体の御ふるまひ、あるまじく候ふ。中々よその人は、さのみ入り立ちてのことを、いかでか知り候はん。身に近く目をもならべたる人、召し使ふ者どもなどの、見まゐらせ候はんことは、みな世に散らんずるとおぼしめし候へ。「うときがものをもらすことのやうに、これは我がうちの者なれば、よも言ひ散らさじ」とて、をこがましきことは出で来候ふなり。人の聞きにくさこそまさり候へども、隠れあることは候はぬなり。

世にありわびたらん人の、よるべなく漂ひ候はんをば、あはれをかけて育ませ給ひ候へ。思ひのほかなることにて、中ごろ、世に経るたづきもすたれ、親しきにも背けられ、うときにもまして言問ふ方なう成りたること候ひしを、育みまゐらせし心苦しきは、おほふばかりの袖も引き足らず、それに付けても、かたくなしきかしづきぐさにいたはしく、荒き風をも、夜のふすまを重ねて衣の薄きをふせぎ、泉の水を澄ましても、扇の風のぬるきを心苦しく、朝に起きては花の開けたる心地して、木高きかげを心もとなく待ち、夕べにふしてはつゆの塵をもすゑじと、常夏の花の匂ひにも過ぎてらうたくまぼり、むば玉の髪の毛の筋ごとに千尋を祝ひてもあかぬ心地して、春の錦も、秋の竜田姫も、我が子のために裁ちかさねんことを思ひ、まだ一重なる袖のうたたね心苦しくて、寒き夜にも床をあたたためて、傍らにふせまゐらせ、雪の光を壁に背ける光と頼みて明かす夜な夜な、多く候ひしにも、目に見えぬ神仏をかこち、いにしへの報いを恨みて、二年ばかりを過ぐして候ひし程に、心をくだき身もなやみて、老い先遠き御ためとのみ、よろづに祈りしに、さやは仏の御誓ひむなしく候ふべきと、宿業のつたなき身をかへりみず、大願を起こして、一たびは恨み、一たびは頼もしく額をつき、経を讀みて、一筋にせめふせ申し侍りしに、満つとまでは候はねども、仏の御しるしにやとおぼゆることのみ候へば、いかにもして、御信強く念じまゐらせて、もし思ふやうなる世を待ち出でさせ給ひ候

はば、人の愁へをやすめ、貧しからん者をたすけん、とおぼしめし候へ。

申しても申しても、ただ夢の世にて候ふに、あぢきなき妄念なくて、仏の御おきて御用意候ふべく候ふ。

〔阿仏の文〕

注 かしづきぐさ 大切に世話する対象。ここでは阿仏尼の娘を指す。

設問

(一) 傍線—— a・bの意味として最も適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a	をこがましき	b	たづき
1	悲しい	1	手段
2	出過ぎた	2	様子
3	並々でない	3	信用
4	ありふれた	4	理由
5	みつともない	5	時間

(二) 傍線—— ア「見まゐらせ候はんことは、みな世に散らんずるとおぼしめし候へ」の解釈として最も適当なものを、次の

うちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 ご覧になりますようなことは、すべて世間に知られていることばかりだとお考えくださいませ
- 2 拝見しますようなことは、すべて世間に知られてしまうだろうとお思ってくださいませ
- 3 拝見しておりますようなことは、すべてあなたが知らせてくださったことばかりだとお思ってくださいませ
- 4 拝見なさるようなことは、すべて世間に知られないようにしようとお考えくださいませ
- 5 ご覧になっているでしょうことは、すべて身内に知られているはずだとお察しくくださいませ

(三) 傍線——イ「まだ一重なる袖のうたたね心苦しくて」は、次の和歌による表現である。これをふまえ、傍線——イの説明として最も適当なものを、後の1〜5のうちから一つ選び、その番号を記せ。

夏衣まだ一重なるうたたねに心して吹け秋の初風

(『拾遺和歌集』秋・安法法師)

- 1 秋風が吹き始めたのに暖かい着物が届かず、娘が一重の夏衣では寒くて寝られないことを辛く思っている。
- 2 秋風が吹く前に一重の夏衣を片付けてしまい、娘が暑苦しい着物で寝ていることを申し訳なく思っている。
- 3 秋風が吹き始めたのに暖かい着物を着せられず、娘が一重の夏衣で寝ていることを心配している。
- 4 秋風が吹いたので暖かい着物を仕立てたのに、娘が一重の夏衣で寝ていることに困惑している。
- 5 秋風が吹き始めたので、娘に対して一重の夏衣で寝てしまわないよう注意を促している。

(四) 傍線——ウ「古い先遠き御ためとのみ、よろづに祈りしに、さやは仏の御誓ひむなく候ふべき」の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 長く生きる娘のために生涯祈り続けてきても、衆生を救おうという仏の誓いを無益だと思ふ気持ちがあるから今の状況は改善しないのだ、と自ら反省している。
- 2 長く生きて娘を守るためにあれこれ祈ってきたのに、衆生を救おうという仏の誓いがかなわない今の状況のまま時が過ぎるらしい、と自らの運命を嘆いている。
- 3 長く生きたいと自分のことばかり強く祈っていたが、衆生を救おうという仏の誓いに今の状況は背くことになるはずだ、と自らを責めている。
- 4 長く生きる娘のためにあれこれ祈ってきたのに、衆生を救おうという仏の誓いが実現しない今の状況のままであるはずがない、と自らを励ましている。

5 長く生きて娘を守ろうとあれこれ祈ってきたが、衆生を救おうという仏の誓いのみにすがらなかつたために今の状況は起こつたのだ、と自ら分析している。

(五) 傍線——「候はぬなり」の「ぬ」と文法的意味・用法が同じものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 潮干ぬと申せば、打ち出づ
- 2 心憂さをかきつらね、涙も落ちぬばかり思ひつづけられて
- 3 赤らひく色ぐはし児をしば見れば人妻故に我恋ひぬべし
- 4 契りおきさせもが露を命にてあはれ今年の秋もいぬめり
- 5 呼びにやりたる人の来ぬ、いと口惜し

(六) 本文の内容に合致するものを、次のうちから二つ選び、その番号を記せ。

- 1 大きな二度の祈願のうち、一度は神仏を恨む結果となり、一度は神仏に感謝する結果となった、と阿仏尼は述懐している。
- 2 そばに仕えている侍女に心を見透かされて、がっかりされるような振舞をしてはいけない、と阿仏尼は述べている。
- 3 心が終始一貫して筋道が通り、落ち着いた誠実な人は、よくも悪くも他人に頼られるものだ、と阿仏尼は判断している。
- 4 思い出すにしたがって書いた手紙なので、重複が多く読みにくいことだろう、と阿仏尼はこわっている。
- 5 二年ほど神仏に仕えて昔の恨みをはらそうとした結果、心身ともに病気になってしまった、と阿仏尼は振り返っている。
- 6 思いがけない事件により、疎遠だったのに手紙をくれるようになった者もいた、と阿仏尼は思い出している。

(七) 傍線——について、阿仏尼が自らの体験をふまえて娘に伝えていることは何か、説明せよ(三十字以内、句読点を含む)。

(以上・六十点)